
残酷な女神・拓己

かなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残酷な女神・拓己

【Zコード】

Z9524B

【作者名】

かなこ

【あらすじ】

拓己12歳。思春期のはじまった彼はある日屈折した暴れ者サミニュエルに出会った。粗野な「星の王子さま」サミニュエル」と可憐な「オーロラ姫」拓己」。ふたりは全く違った個性と境遇で生きてきたのに、強く惹かれあう。そして15歳になった彼らは口サンゼルスからフィラデルフィアへ旅をする。

サミニュエルの心に追随する拓己とは、大きな隔たりとなつて彼らを無残に引き裂く。そして事件は起

れる。アメリカを舞台に少年たちの成り生と性が交錯するロードム
ービー「残酷な女神」第2説。

1-2歳の出来事（前書き）

「残酷な女神」第1説（完結）はいぢら <http://ncod.e-syosetu.com/n9414b/>

12歳の出来事

「あ……」

強い快感のあと急速に下降する脱力感。

またやってしまった…

僕は自分自身の行為に恥じ入るだけだった。体の奥からビバビバと
したものが次々に沸いてきて、それに絡めとられてしまつ。

…これが女性との行為なら「愛」とやらに詰びつくるのだろうか?

僕は全く不気味であった。

- - - - -
「やつぱり自分ですると、想像するなら、胸とお尻の愛撫度合い
が集中している?それとも相手をよがらせる?」とが興奮をそそつ
?」

今日の朝食はめずらしく母がいる。朝から、こんな会話をうちでは
めずらしくない。彼女は性については、ほとんど「研究家」なのだ。

僕は真っ赤になる。まだ15歳の僕にとっては、行為を見透かされ
たみたいで最も避けて欲しい話題だった。

「そんなこと答えたくない」

「まあ、いいけど。自分のセクシュアリティを考えるのはすごく大

事よ」

恐ろしいのは、彼女の口調が非常に色っぽいことだった。そのため僕は母親に反抗する少年にならうとしても、いつもくじかれてしまう。ちょっとと反則のような気がした。

「おもしろい本持つてきたの！ほらっ」「

指指したテーブルには、数冊の本がつまっていた。

「うん。分かつたよ」それはいつものパターンだった。

「もつと強くなつてからかかつて来な、ベイビー」

地面に突つぶしたエリックにむかって、サミニュエルは、得意げに言い放つた。いつもは、やられていた僕たちが言われていたセリフなのだ。

「覚えてろよ！」

エリックたち3人は、腰をさすりながらヨタヨタと駆けていった。

「いえーい！」「やつたぜー」「ばーか、ばーか」僕たち4人

組は手を叩きあつて喜んだ。

気の弱いちょっと太った口音、黒人で目の愛らしいディビット、そして僕とサミニュエル……なぜか僕たちは友達だった。

サミニュエルに出会つたのは3年前の12歳の夏だった。ホワイト・アングロサクソンの彼は金髪を短く刈り込んで（3分刈りという表現が日本の？）捨て猫のようなブルーブレイの眼をもつた少年だった。不遜なオーラは、初めていつた柔道教室ですごく目立つていた。

「オマエ何か他のスポーツやってるだろ」

はじめて受け身の練習の相手をしてもらつたばかりなのに彼は僕がバレエを留つていることを見抜いた。

僕は言いたくなかった。低所得の子弟も多く通つている柔道教室に、プレッピ・スクール（有名私立の進学校）に通い、習い事に明け暮れていた僕の境遇を話したくなかったのだ。少年とはそういうものだ。いい子であるより、不良であるほうに憧れる。

「何してるんだ？」

サミコエルは結構しつこかつた。

「バレエだよ」

あきらめて答えた僕は、絶対にカラかわると思つた。しかし彼は意外な反応をした。驚き見開いたブルーグレイの眼に暖かい光を宿していた。

「踊つてみてくれよ」

「え？！」

「バレエを踊つてみせろ、って言つたんだよ」

あまりに驚いて僕は

「こんなトコで？！ 絶対嫌だ！－このは柔道の教室だ－」

「じゃあ、おまえの家に行くから

「？？？」

全くもつて分からなかつた。彼は僕をいじめるために柔道教室の前の前でバレエを躍らせたいわけではなかつたのだから。

僕の家に入つてからサミニュエルは黙ってしまった。

恐らく家の家具や作りが彼の家と全く違つた世界であつたことによる、驚き・羨望・嫉妬・怒り…といったものによるものだろひ。

リビングは1000スクエアフィート（93平方m）しかないが、練習をする僕の為に半分は家具を置かない形になつていた。一面の鏡とバーが少し普通のリビングとは違うがアッパー・ミドルクラス（上流の中）の家では、それがそんなに気にならない。

最近のお気に入りヨガパンツに着替えた僕は、軽くストレッチをした後、モダンバレエの中でも自然な動きの振り付けのものをセレクトして披露した。

「グレイイト…………す」「い！」

興奮してサミニュエルは椅子から立ちあがつた。

「こんなので、よかつたのかな？」

「おお！ かつこいいじやん！ あんな動き出来たら、どんなダンスだって簡単にマスターできる！」

確かに。バレエが踊れたらヒップホップもタップもそんなに難しくないだろう。

「けどや、アレ なんだつけ…クラッシック？ のも見たい」「え」

「よく知らないんだけど、ラーララララ ってこの曲？ 分かるか？」

「ああ”バラのアダージョ” 眠れる森の美女だね」

サミニュエルは音程がしつかりしていたので、ワンフレーズでもよく分かつた。

ただ困つたことに、ここで主役の王子のパートはないのだ。 16歳

の誕生日を迎えたオーロラ姫が皆に祝福される場面。4人の王子が求婚に訪れオーロラ姫はバラの花を次々と受け取る。という場面なのだ。

「オーロラ姫は踊れる?」

「もちろん」

そのままCDをチャイコフスキーに替えて、ローズ・アダージオ流す。

相手のいないところを、上手にこなしながらオーロラを踊る。可憐な16歳のオーロラ。アチチュードのあと、手を高く上に上げ両手でポーズを作るとしつかりとバランスを取つて、この場面は終わる。

「どう?」

僕に聞かれて、急に不自然な笑顔を作ったサミュエルに気づいた。

「ああ。よかつたよ…」

「少しへんだつたかなあ」

「そんな! 全然そんなことないよ! ちょっと綺麗すげいでビックリしたんだ」

「そう でも、サミュエルがスリーピング・ビューティー(=オーロラ)が好きだってことはよく分かったよ(笑)」
ちょっと一ガテそうに笑つてサミュエルは言った。

「母さんがバレリーナだったんだ…」

サミニュエル

サミニュエルの母は、彼が6つの時に出て行った。父の暴力と無能さに耐えかねたんだ、とサミニュエルは言っていた。

じゃあ、どうしてそんなヒドイ所にサミニュエルを置いていったんだ？　ということは口が裂けてもいえなかつた。それは彼のアイデンティティを根本から搖るがすセリフだからだ。

いま彼はダウンタウンで臨時雇いの仕事をしている父とふたりで生活をしていた。酒を飲んでは、時折、彼はサミニュエルに暴力を振うらしかつたが、柔道を始めたサミニュエルは少しづつ抵抗をしはじめていた。

「送つていくよ」

ポーチを出た僕たちは、隣が引越し中であることに気づいた。そういえば今日は新しいお隣がくると聞いていたつけ。

じつとこいつを見ている少女がいた。肩下のブルネットの髪を無造作くくり、長袖のTシャツにジーンズ。

それがローラだった。

ローラと僕は同じ世界の住人だった。父親はある財団の重役、母親は弁護士、3つ年上の姉は有名・私立女子高校に通っているという。ローラのまづは僕と同じ共学のプレップスクールに転校してきた。

行動範囲がよく似ているので、よく話をする機会があつたが、独立

心が強く正義感に燃える少女だった。僕の母はそんなローラを気に入ったようで、近所で会った時などは積極的に声をかけていた。ローラの方も母に憧れをもつていたようだ。

「ハンサムでセクシーだね。タクミのお母さんは」

オープنسペースのカフェでローラが言った。今日はチャリティ・バザー実行委員としての話しあいだった。

「そうかなあ」

「かつこいいよ 憧れちゃう！」

…かつこいいかもしねないが、物心ついた時から不在の母に不満を持つていた僕はローラに微妙な怒りを感じた。

「ローラのお母さんだって弁護士だしカッコいいじゃない？」

「だめよ、マミーは、依頼がくれば悪い人だつて弁護しちゃうんだもん」

「それは仕方ないよ。弁護士だもん」

「普通の人みたいな事言つのね、タクミも。がっかり！」

自分の不満は、ハッキリ言うなあ…

「あたし、最近、あの子 サミュエルによく会うのよ」

思い余ったようにローラは唐突に言った。

「え？ サミュエル？」

「そう ピアノ教室の帰り、とか学校の帰りとか、あたしの行動範囲を知っているみたい。なんだか怖いわ。タクミはサミュエルとどういう友達なの？」

びっくりした。

「えっと、柔道仲間……？ ときどき彼の家に集まって話とマンガ読んだりゲームしたり、楽器の演奏したり……」

「？」

合点がいかないようだ。早くいえば悪友なかもしれない。僕以外の3人はダウンタウンの幼馴染だが、僕はサミュエルを通じて彼らとつるんでいたのだ。彼らとすると、子どもらしくいてもバカにされる事もないし、楽しくて面白いことがいっぱいあったのだ。

「最近は忙しくって、サミュエルとは会っていないんだ。 今の話は知らなかつた。驚いたよ」

「こんど会つたら、止めるよ」と言つておいて

「うん……」

理由が知りたかった。

でも、何となく理由は分かつていた。さつとサミュエルはローラが好きなのだ。だけどどうやってアプローチしていいか分からなくてつて、ストーカーまがいのことをしてくるのだろう。

境遇のちがい

「今日はこまいまいち気分がノらない……」

そう言つと、サミコエルはギターを肩からはずした。ロイディビットは残念そうに楽器から手を下ろした。

僕たちはバンドを組んでいたけど、オチこぼれクラブなので練習はサボつてばかりだった。ロイはベース、ディビットはドラム、僕は基本はキーボードだつたけど、他の楽器もサポートしていた。

「今日は解散しよう」

サミコエルはいつもリーダーだった。

「サミコエル、ちょっと話があるんだけど」

意外そうな顔をした彼は、

「うん……」と答えた。

「じゃあ、オレたち帰るよ。また来週な！」

「練習しつけよ」

ディビットとロイはそのまま帰つていった。

「飲めよ」

冷えた水筒を僕はサミコエルに渡した。中は「コーラだった。なぜか今日はコーラを馬に用意してもらつた。^マ馬は僕の中国人の乳母だつた。

「なんだ? これ?」「コーラかよ」

「グリーンティとでも?」

「オマエ、日本人ならグリーンティか水だろ?」

なぜかサミュエルといふときは、「コーラとかペプシとかジャンクフード類を摂りたくなるのだった。普段食べないのに、このグループにいるとなつてなるのだ。バカな話をしながら、つまんでいると最高に楽しかった。

「アレ、弾いてくれよー。」

「OK」

僕はギター（楽器は中古屋で買つたり、貸スタジオでリースをしている）を、取り上げるとジョン・レノンのビューティフル・ボーイを奏で始めた。

サミュエルはこの曲が好きだ。

Every day in every way
毎日 すべての事が

It's getting better and better
だんだん良くなるんだ

Beautiful Beautiful Beautiful
Beautiful Boy

美しい、美しい、美しい

「美しいボーイ」

父の息子への愛を歌つたこの歌は、サミュエルにとっても父のいない僕にとっても特別の歌だった。

Darling - Darling - Darling - Darling - Darling

bg..

「...サミュエル!」

声をかけた。本当はそのまま、彼の名前で歌いたかったけど。

「ローラの」と…

「…」

「どう思つてゐる?」

「別に」

氣达尔そうに答えた。ブロンズがかつた瞳の影が横を向くと一層濃くなつた。

「よく 分かんないんだ ムカつくような、気になるような。あんな高慢ちきな女、いつそやつちやたらどうかな、とか」

「

分かるような気がした。

「でも… そんな事したら、(バンドで) テビューも出来なくなっちゃうよ」

「ふつ」

サミュエルは笑つた。

「そんな事本気で言つてるのか？ 僕たちにデビューなんて出来るものか、どうやつたつて …… こんな才能じや出来ない それはオマエが一番分かつているハズだろ！」

「そんな事ないよ！ もつと練習すれば可能性はあるー！」

「本気で言つてるのか？ 人生は生まれたときから決まつていいんだ！ 才能も金も！ 不公平なもんだつ！ ああ、オマエはいいだらう。」

「 オマエは才能がある、環境も問題なし、だ！だが俺たちは違つんだよな 」

「 そんなどない！ 」

僕は声に出して言いたかったけど、どう表現していいか分からなかつた。サミュエルの絶望やイラだちを理解しながら、共感は出来ない生まれと育ちを憎んだ。

貧富の差の激しいアメリカで這い上ることは、絶望的なほど苦しい。その辛さ、イラだち、欲望は成長するに従つてサミュエルを襲っていた。

目の前にある僕とローラの存在はサミュエルに決定的な打撃を与えたのかもしれない。

「 でも、僕はサミュエルのことは友達だと思つてゐるから…… 」

「 帰れ 」

サミュエルは横を向いたまま僕を見ようともしなかった。

僕は貸スタジオのドアを出た。

「 母さん、東京に行くの 」

数日たつた夜、母は告げた。

「 へえ。学会？」母は音楽プロデューサーの仕事の他に、女性団体

の活動もしていた。

「違う。東京に帰るのよ。あっちに住んであっちで仕事をするのよ」
「？」

あまりにも突然で何を言っているのか分からなかった。

「東京で何をするんだよ？」
「あっちでスターを育てるのよー。」

母は上気した顔で答えた。

「拓己も一緒に来てくれないかしら」

…………

「い、嫌だよっ！……それにスターって何？日本でも音楽プロデューサーするつもりっ？」

「もちろん。事務所を構える予定よ。それに、日本に、そろそろ帰りたいと思つていたの」

それは

大きな郷愁であつたの…

16歳で日本を離れてひとり大きなアメリカで戦ってきた母。父との死別、仕事、つきあつた男たちとも結婚することなく、女手ひとつで僕を育ってくれた母。

異国での生活はどんなにかハードだったかしれない。

改めて母の強さ 意志の強さ、学ぶ力、なみなみならぬ努力にひれ伏したくなるような感慨を覚えた。

「うん。分かったよ 考えてみる。でも、行くとしても、すぐには無理だからね」

「じめんね、拓己。」

「お母さん勝手なことばかりしてきて

無理して東京に来なくともいいわ。あなたはこっちで育つたんだしせっかくプレッブスクールにまで通ってるんですね」

「スクールだけじゃないんだ…」

僕は2年とび級をしているので進学に對してはそんなに気にならなかつた。

サミュエル

ロイ、ディビット

スクールの校風や行事、友人たちもそれなりに気にいっていたし、バレエやヴァイオリンのレッスン、ボランティアサークルのことも気になつた。

頭をもう少し整理しないと答えは出なさそうだった。

「いい子にしててね

ぎゅっと抱きしめてくれてから、ママは必ずその後おこにキスしてくれた。

それが嬉しいって

「やだやだ！いい子にしない！ もー回抱つこじてー。」

小さな僕は何度もせがんだ。

母は時間に急かされながらも、何度も抱擁とキスをしてくれた。最後には、聞き分けのない僕は、叱られてしまつ。

「坊ちやま、馬マと遊びましょうね」

馬マになだめすかされて、あきらめる、というパターンの繰り返しだつた。

そして、今度も

「いい子にしてね」

おでこにキスをして母は東京へ旅立ってしまった。

母が東京に旅立つた日の夜、サミュエルから電話が入った。

「タクミ… オレ、ロスを離れるよ…」

僕は血相を変えてダウンタウンに走った。

「親父と大喧嘩しちまつた… 殴ってきたんで、こっちも殴り返してやつたんだ。もう最後には“出てけつ”て言いやがるもんだから“出でつてやる”って。飛び出してきちゃつたんだ…」

公園の入り口でサミュエルはぼんやりと塀に腰をかけていた。

「サミュエル！」

よかつた！居た！

「タクミ…」

切れた口元を引きつらせて微笑んだサミュエルは、悲しいほどに美しいかった。

「（顔以外）どつか打つてない？」

「ああ… オレはクロオビだから（笑） 本気でやりあつたら親父なんて簡単だよ。最初は殴られてやつてたんだけど」

アンバランス… 15歳の白人の少年は体格は大人よりも強かつた。だが社会的には全く非力だった。

「僕の家においてよ」

二

電話で最初に聞いた言葉を思い出して僕は恐怖を感じた。
離れる』サミニュエルはそう言つた。

「行のル」

靈れいノ声で語られた

母さんかいるんだ

近所のおばさんから聞いたことがあつたらしい。サミュエルのお母さんがフィラデルフィアで生活している、という事を。彼はその婦人から、連絡先を聞き出していた。

サシペラハジリノトトロノハシニテ

卷之三

「一緒にフィラデルフィアに行くから。お母さんが見つかるまでついていく！」

空には小さく星が輝いていた。

- - - - -

インター・ステートハイウェイは全米を縦横に入っている高速道路。僕たちはお金がないので高速バスを利用することに決めた。僕の家はお金に困っていなくても僕は現金を持っていない。いつもは馬が大きな買い物の支払いをしてくれるからだ。手持ちの小金をかき集めてポケットに入れたら。

東西の大陸横断路線は、口サンゼルスからメキシコ湾岸を経由してフロリダのジャクソンビルへ抜けるInterstate 10。そこからアメリカ大陸を上に上がる形でInterstate 95にかかる。東部の有名都市をそのまま網羅するI-95は途中フローテルフィアも通過する。

朝8：00出発。夏休みにも入っているため少し乗客は多いようだ。僕たちは中央より少し後ろ側の席に座った。

市外の車窓を眺めていたサミコールも僕も、しばらくすると砂漠とか渓谷と並の台地が延々と続く大地ばかりになると見飽きてしまった。

僕は昨日からちょっと熱っぽかったが、だんだんと気分も悪くなつてきていた。マズい…

「ごめん、サミコール　ちょっと僕、酔つたみたい」

「え？　ああ、本当だ。顔色悪いぞ　えーと、確かここに「エチケットバックの代わりを探そうとしているようだが、なかなか出てこない。

「いい　ちょっとこうやっているとよくなると思つから　」本当は酔つてなくて熱っぽいんだ。サミコールの肩をかしてもらうことにした。…ちょっとヤバい光景だけど、まあ、誤解されてもこりは西海岸だから（笑）

いつのまにか眠つていた。
え？

「タク//」めん！ ちょっと……！」

不意にサミコエルは立ち上がりトトイレに行ってしまった。

僕はひどい事に肩どころかサミコエルの膝まで倒れていたのだ。そして彼のペースは反応してしまったのだ。

「よつと 、いやかなり、

大変だよね 」の年頃つてさ。

エレクト自体あんまり意味なんかないんだ。

「あーー

」めん」

帰ってきたサミコエルは地べたを見ながらでしか話が出来なかつた。

身体の支配権

「いいよ そんなの。よくあることや。サミコールは悪くない。僕が悪いんだ なにも膝まくらまである」とは無かったと思つよ（笑）」

「だつてタクミがシリラをつだつたからさ。オマエ、熱あるんじゃないか？ 熱かつたぞ」

「ちょっとね 風邪ひいたのかもしれない。でももう大丈夫だよ。ずいぶんとラクになつた」

「ならいいけど」

心配そうにサミコールは言つた。

しばらくしてからサミコールが口を開いた。

「なんでこんな体になつてしまつのかなあ。ペニスに人格を支配されてるみたいだ」

「うーーん、それが第二次性徴だとしたらヒドイと思う。頭が付属品だもの。主導権を下半身に握られていて、普通の生活もままならない！ それを知らぬ顔して学校行つたり、女の子と話すなんて無理があるよ」

「このウズウズした感じを収めるにマスターべーションかSEXの2つしかないのか？…なんか、嫌だな」

「それは僕も同じだよ。終わつた後の嫌悪感はなんともいえない」

話題が話題なので声のトーンを低めた。

「「Jの間読んだ”野生人の研究”では、マスターべーションもSEXも知らなかつた野生児は性欲らしきモノが起つても、ウロウロ、

ソワソワするしか出来なかつたらじこよ

「本当か？」

「じゃあ、方法を知つてゐからオレたちはこんな事しちゃうんだろ
うか」

「じゃない？マスター・ベース・ションもSEXも所詮、文化なんだよ。
誰かから形を教えてもらつからやつてるんであつて、方法を知らな
いと出来ないかもね」

「うーーん…… そなのかなあ…… でもペニスがエレクトしたら普
通氣になつて触るだろう？それがマスター・ベース・ションを発見するこ
とに結びつかないともいえない」

「だから、そのHレクト 자체が自然なのかどうかが追求できてない
んだよ。僕はまだ」

「オマエそんなこと真剣に研究してゐるの（笑）」

「母さんが、そういうことばっかり研究するんだよ」

「はははは…… 面白いよな。オマエの母さん。じゃ、彼女に聞いてみ
れば分かるかもな」

「嫌だよ！ 恥ずかしい！」

「………… ？ おおかあ？ これ言ひちゃあタクミ怒るかもしれない
けど、彼女のSEXセラピーをぜひ受けてみたいよ」

「 あの人、変な色氣があるからね」

「 … タクミと似てるしね…」

最後にボソッと言つたサミュエルの言葉がしばらく頭を離れなかつ
た。

本当に大事なもの

夜7時。僕の体調があんまりよくないので、フラッグスタッフで一泊することにした。ルート沿いのモーテルを選ぶ。

未成年はヤバい。だいたいアメリカという国は子どもに旅もさせてくれない。下手したら親は逮捕されるのだ。もちろん未成年者同士の宿泊も禁止されている。

まず事務所にいる人物を遠くからチェックする。しつかりしてそつな人物のモーテルはバツ！あるモーテルは、おばあさんが係りだつた。僕は童顔すぎるのでサミニュエルに事務所に行つてもらう。サングラスをして、精一杯大人のふりで…

ヤバいなら、走つて逃げよう！

けど、大丈夫だった。

おばあさんは目が悪いのか、背が高く柔道をして体格のいいサミニュエルを疑わなかつたらしい。よく見ると、顔やボディラインが子どもなんだけどね（笑）

アメリカのモーテルはほんと、安価なホテルとしてよく利用される。1泊2000円～3000円ってトコかな？食事は基本つかない。

「はあ～！」
「つかれたあー」

二人ともベットに体を投げ込んだ。

「サミコエル、僕シャワー浴びるよ。今休んだらもう起き上がりな
いから。僕のデイバッくから何か出して食べておいて」

「OK！腹へつた」

バタン

小さくドアに閉まる音がした。サミニュエルがベットにいない。

時計を見ると3時。こんな時間にどうしたんだね？

このモーテルは前に庭があつて、大きな木が植わつている。その前にサミニュエルは立つて木を見上げていた。

声がかけられなかつた
うだつたからだ。
見てはいけない彼の心の表情をみたよ

いつも勝気な瞳の色が、子供の表情のようだった。広い宇宙にひとり、ぽつねんと取り残されたような、でもそれで満足のような顔だった。

彼の表情がフッと現実に返った。

「サミニユエル」

僕は今来たように声をかけた。

「ああ、どうしたんだ？」

「それはこっちが聞きたいよ（笑） 木見てたの？」

「ん。これはバオバブみたいだな、と思つて」

「え？」

その木は全然バオバブとは似ても似つかなかつた。

「あのオーストラリアとかにある？」

「う……ん……いや、”星の王子さま”に出てぐるバオバブだよ

「？」

「形は全然違うけど、そんな気がしたんだ。 オレはこの先どうしたいんだろう？本当に母さんに会いたいのかな？」

「」

「”星の王子さま”はよく読んでもらつたんだ。けど、いつも訳が分からなかつた 分かったのはバオバブが恐ろしい木だつてことと、主人公の僕が飛行機に乗つっていた、つてことだけ。王子さまはどうなつたんだろう？」

僕は怖くて王子さまの結末を教えることが出来なかつた。 確か王子さまはヘビに咬まれて死んで星に帰るのだ。

サミコエルはお母さんに会つことに恐れを抱いているんだ。自分を捨てた母親に会うなんて、怖くない訳がない。バオバブの恐ろしさは彼の心の象徴みたいだ。

「友達になつたキッネは王子さまに言つんだ。”いちばん大切なものは目に見えない”て。でも象徴的すぎてよく分からぬよね」

「ああ、そのセリフはよく聞くな」

「その後読むとちょっと分かるんだ。主人公の”僕”と王子さまは砂漠の中に井戸を見つけるんだ。その井戸の水はふたりにとつてた

だの水じゃなかつたのさ

「すごく元気になる水だったとか？」

「違うよ（笑）ふたりが過ごしてきた時間をもつた水だったからさ。ただの水じゃない、特別な水なんだ…」

「特別な
」

サミニョエルはちょっとと考えるような顔をした。

「確かにふたりが過ごした時間や親密さはその水に含まれている。けど見えないよな？」

「うん。そうみたい」

僕は微笑んでいた。

「そうなんだ、たとえこの旅の先にどんな事が待ち受けっていても、僕とサミニョエルで過ごしたこの時間は特別なんだ。」

「子どもの頃は飛行機乗りになりたかったんだ。だからオレは主人公が飛行機乗りだった事をよく覚えている」

「今もパイロットになりたいの？サミニョエルは？」

「…分から…」

サミニョエルはしばらく黙つた。

「自分が何になりたいのかなんて 分からない。今は迷宮の中に入りようだ」

「だめだよ ラビリンスにいたつて心でものを見ないと
？」

「座つて」

僕はサミニョエルに芝生に座らせた。

そのまま背中を合わせて僕も座った。

顔を見てないのに、近くなれた気がした。

「いりやつてこると気持ちがいいんだ」

「…うん」

「安心するんだ」

「うん」

僕とサミコエルが安心できないのは、無条件で愛してくれる人がいない、という事実だった。母はいつも自分を生きるのに一生懸命だつたし、どんなに小さな僕に対しても”人間”として接していた。尊重してくれていた、ともいえるけど、盲目に愛してくれている、という感じがしなかつた。

僕とサミコエルは、不安でたまらなかつたんだ。だから僕たちは双子のようなものだ。

「僕はこの時間を忘れないよ。この先状況がどう変わつても。そのせいでつらい思いをするかもしれないけど

「オレも…すごく不安だけど、タクミが言つている事は分かる。

…この木も星空も空氣も　きっと特別なものになるんだろうな

「そうだよ。空を見上げたらサミコエルのことを思いだすよ。”星の王子さま”と聞いたらサミコエルの金髪を思い出すよ　だから、この時間は特別なものなんだ」

そのまましばらく僕たちは黙つて空を見上げていた。

僕たちは”未来”という不安と戦いながら、それでも前に進むのだろう。けど、”いま”を生きることも忘れてはいけない。

「タクミは将来何になりたいの？」

「うーーん、やつぱり”音楽”がしたいな 何になるのかはよく分からぬけど」

「それはいいな

ほんとはサミュエルたちと組んでバンドデビューしたい、とは、ちよつと言えなかつた。また不機嫌になられたら困るかい。

「そうだ! サミュエル、日本に行つてみない? 母さんが向こうにこつたんだ! 柔道も禅も本場だよ!」

「にほん? !」

少しサミュエルのトーンが上がる。彼が柔道や日本の武道に興味を持つてゐることを僕は知つていた。

「うん。費用なんかは母さんに出わせても、夏休みだし、いひど日本に行つてみようよ」

「うーん、面白がりやつ……」

彼の声に力が宿るのを感じた。

「マーカキヤマ(柔道の師匠)がよく言つてる、ブシグードシグーも習えるかな? 」

「マーカキヤマに紹介状書いてもらおつよ。そしたら日本でサミュエルにしたいことも見つかるかもしねー!」

「やうだといじナビ」

「なに?」

「オレ、にほん? しゃべれないんだよな……」

「ぶつ! ?」

「あ、オマエ笑つたなー」

そのままサミュエルは背中をはずして、口づきを向いた。「あー」背中をはずされた僕は転がる形になつてしまつた。

押ししつぶされそつな母との再会の不安を胸に、サリコエルの心は少しでも軽くなつたろうか？夜明けの空がしらんでぐる氣配を感じながら、星たちは遠慮がちに瞬いていた。

危険

次の日、僕たちは飛ばした。何をどう思つたか、どうしてか早くサミコエルのお母さんに会つ決着をつけたかった。

だから、夜もそのまま深夜走行のバスに乗つていくつもりだった。

イリノイ州スプリングフィールドについたのは夜中の1時もすぎた頃だった。30分、次のバスが出るまでに時間があった。

お手洗いに出たのが失敗だった。

僕たちは、たちのよくない連中に目をつけられたのだ。僕の外見が日本人だから旅行者と間違われたのだろう。お金もつていると思われたのだ。

トイレを出たところで後ろから声をかけられた。

「おい、オマエ！金を置いていけ！」

相手は銃を持つているような気配がした。後ろは見れない。サミコエルは30メートルくらい向こうにいた。

「OK… 財布はバッグの中にあるんだ」

「ゆっくりと下ろして、こっちに投げる。後ろを向くな！」

2人、3人？ いや、2人までだ。

肩からリュックをゆっくり下ろす。そのまま急に後ろに向いて僕は1人に向かつてバックを下から投げつけた！ 同時にもう1人の足をひっかける！ もんどりを打つて1人はひっくりかえった。

「うわー！」

「Shift！何しやがる！」

僕はそのまま彼らの後ろに逃げた。幸いなことに銃は持っていないのか撃つてこない！

「待て！」

自分たちの後ろに逃げられたのが、意外だったのか、追いかけてくるのに時間がかかった…ようく僕には思えた。

そのまま僕は暗闇の中を走った。

はあ、はあ、はあ、はあ

サミコエルはきっと気づいただろ？…

どうしようか…？バス停に戻るのは危険だろ？
物陰に隠れながら僕は考えた。

何となく嫌な気配だ。あの二人はこのあたりに詳しそうだし、深夜バスの旅行者を狙う常習犯みたいだ。もし仲間なんか呼ばれたら大変だ。

僕は通りに出た。

少しでも人に紛れたかったからだ。でも夜中の1時すぎに、ダウンタウンの通りにいるのは酔っ払いや麻薬中毒者のような人間ばかりだった。

今にも何かされそうな緊張感に耐えながら僕は通りを走った。こんな時ほど人を惹きつける僕の容貌をうらむことはない。

パン！パン！

その時銃声が鳴った。

振り向くと、右後ろの通りで黒い影が呻いている。

「タクミー！」

「サミニュエル？！」

どうやらサミニュエルが撃つたらしい。うずくまっている影はさつきの男のうちの1人みたいだ。

「逃げるぞ」

「うん」

「こっちだ！」

「えっ」

「これに乗れ！」

男が乗っていたと思われる車がそこにあった。サミニュエルと僕は乗り込んだ。

どこで覚えたのかサミニュエルは車を急発進させてダウンタウンを横切った。

「このまま街を出るぞ！」

僕たちは夜の街をぶつ飛ばした……

「えつと、えーと、そのまま通りを出たら南下して…インターで
イトに出る…」

「南下？…どっちだ…」

「うーと、左…」

標識を見ながら、記憶の地図をたぐり寄せる。地の利がない場所では大通り、大通りと道を辿っていくしかない。

S T L O U I S
セントルイス

この文字の標識を見てやっと僕たちは息をついた。

「サミュエル、運転できるんだ」

「まあな タクミだってもう仮免取ってるんだろう？」

「いや、僕はまだよ」

「…大丈夫？」

「オレの腕は確かだぜ」

確かにサミュエルは運動神経は抜群だし、運転もうまかった。だけど僕は色々と心配になってきた。

「オレが銃を持つてたのが気に入らないのか
サミュエルが僕の心を読んだように言った。

「いや、そんなことないよ。さつきは本当に危なかつたし… サミュエルが助けてくれなかつたら僕は今この世にいなかつた

「…親父の銃 持つてきたんだ」

「…」

「オレは撃つたことを後悔しない！オマエは絶対に守るんだ… そのため人に殺しても構わない！」

きっと結んだ薄い唇でサリュエルの決意が現れていた。僕は急に泣き声になってしまった。

「……」めん…

「あやまるな

こんなに広い世界なのに、僕たちは暗いハイウェイを走りながら走るだけなのに、僕はすごく嬉しかった。

母へ

ペンシルバニア州フィラデルフィア！！！

かつてはアメリカ合衆国の首都でもあったフィラデルフィア・ニューヨークから車で一時間半位で着くフィラデルフィアは合衆国建国にまつわる歴史的な場所が数多くある。

ダウンタウンの中心に市庁舎がありインディペンデンス公園や星条旗を最初にデザインして縫つた女性・ベッティ・ロスの銅像があつたりする。

ギリシャ語で「兄弟愛」を意味する都市を僕とサニユエルが訪れたのは運命的な気がした。

「F M F 財団、ここだ」

サニユエルのお母さんがここで働いているらしい。もっとも、数年前の情報なので彼女がいるかどうかは分からぬけど。

車を近くのマーケットの駐車場に乗り捨てた僕たちは埃まみれでの建物の前に立った。

リーン

受付のベルを押すと中から人の良さそうな中年の婦人が出てきた。

「どのようなご用件ですか？」

サニユエルはお母さんの名前を出して、ここにいるかどうか尋ねた。

息子だとこいつとも話してみる。彼の声が震えているのが分かった。

「ええ、と。少しお待ちください。……いませんね。もう今うちの財団にはおられないみたいですね」

「何年か前の名簿は分からぬのですか？」

僕はたまらずに口をはさんだ。

「ちょっと待つてね。うーんと、そうだわ！アグネスに聞いたら分かるかも！」アグネスは名簿の係りなのよ。連絡してみるから、そこに座つて待つてちょうだい」

急に婦人は僕たちにくだけた口調で言った。ここの人たちは女性団体だけあって、ボランティア精神も持っているようだ。普通のオフィスならこうはいかない。

「連絡がついたわ！」

アグネスは古い記録から、サミニコールのお母さんの住所などを調べてくれた。

「ただ、いひいった事はややこしいんで、オフィスに来てもらひつ」とにしたの。いいかしら？」

「…はい」

直接住所や電話番号を教えることは出来ない、ということだ。サミニコールが本物の息子であつても事件などにならない可能性はないわけではない。

数年前に捨てた息子 憎まれていて当然だ。

サミニコールのお母さんはどんな気持ちでアグネスの申し出を受けた

のだろう。

サミコエルは気分が悪そつだった。顔色が悪かった。
1時間半ほどして、僕たちの待つカウンセリング・ルームにサミコエルのお母さんはやつてきた。

澄んだ目をした…サミコエルと同じ美しい金髪の女性が現れた。もつとくたびれた感じかと想像していたが、彼女はつらつとしたオーラを纏つて登場した。その印象は16歳のオーロラ姫の残像を確かに残していた。

ただ、サミコエルに会つてこまほひどく動搖した様子だった。

「サミコエル！！！」

彼女はサミコエルを見るなり、田にいっぽい涙を浮かべて呼びかけた。

「大きくなつたわね」

「……」

サミコエルはどういつていいか分からないらしく、ぼうと立つて彼女を見ていた。

「じめんなさい、じめんなさいね　あなたを忘れていた訳じゃないのよ…　でも、どうしてもビリーに会つことは出来ないの」
ビリーというのはサミコエルの父親だ。

サミコエルは両手を少しひらいたまま悲しそうな顔をした。

「おかあさん…」

「…？」

「どうして僕を向かえにきてくれなかつたの？」「

「や、それは…」

「僕をキライだから？お父さんの子どもだから？」

「ちがうつ、違うのよ… サミュエルを愛してるわ。一日だつてあなたのことを見れたことなんてなかつたのよ…」

「だつたら、どうして僕も連れていつてくれなかつたの…！」

サミュエルは絶叫した。

「どうして！？ 僕を捨てたの？ 捨てられても僕はあれからずつと待つっていた。お母さんが向かえに来てくれるの、ずっと待つてたんだ！ なのに、あなたは来なかつた！」

サミュエルのお母さんは口に手をあて泣いていた。

「「めんね

彼女はもはや倒れる寸前だつた。

「「めんなさい あたしが悪いの サミュエルから逃げたんだわ…自分を守ることしか考えてなかつたのよ…きつと…」

彼女は真っ青になりながら続けた。

「あなたも連れていきたかった。でも私には自信がなかつたの。子どもを連れて生きる自信が… ジニーから逃げるのに必死だつた。きっと私は頭がおかしかつたのよ…」

「

サミュエルも父親の母への暴力を思つたのだろう。沈黙は彼女への

共感の一部だった。

「あれから、私は流れに流れて色々な仕事をしたわ。そりゃあ、もう地獄のようだつたわ。だからあなたを連れて来ずに本当によかつた、と思つた。」

「

「でもそれは言い訳にならないわ。最終的にフィラデルフィアで私は女性の社会的圧力を救う団体に助けられたの。ここに来たのも、その関係者に紹介してもらつたからなの」

「こまは…」サミコエルが口を開いた。
「何をしてるの？」

「今は… もつと小さな事務所で働いているの。ボランティアもするような事務所よ」

「か 家族は？」

かすれた声でサミコエルは聞いた。

「……夫と 息子がひとり

景色が

真っ白になつた

お母さんには、息子がいた

彼女の愛はその子が独占している

もつ、これ以上聞く」とはなかった

「やつ…」

サミコエルはとても優しい声で返事をした。

「サミコエル… ねえ、何とか言つて…ひどい、とか憎んでやる、とか…！」

「そんなこと言わなによ」

「そうだわ、うちに来ない？ 来てちょうだい！！ だってあなたは私の息子だもの！ ね！ 大丈夫、今度の夫はとても優しい人なの！ 受け入れてくれる、もちろん殴つたりなんかしないわ！」

お母さんはほどんど錯乱していた。

「お母さん」

「なに？！」

「よかつたね…」

こんなに優しい顔をしたサミコエルを僕は初めてみた。悲しい、悲しい優しい顔だった。

ああっ…とサミコエルのお母さんは泣き出した。

「お母さん、ひとつだけお願いがあるんだ

「…？」

「僕を抱いてくれない？ それで”サミコエル、おまえを永遠に愛している”って言って欲しいんだ」

「サミュエル……！」

その瞬間、じりえきれないよつて彼女はサミュエルを抱きしめた。

「サミュエル……サミュエル……」

「あなたは私の子、私の子 永遠に愛していくわ……永遠に愛して
る……」

僕は

泣いていた

こんな

悲しい光景をみたことがなかつた……

崩落

僕たちは空港に立っていた。

馬^マに電話するとフィラデルフィアまで飛んできたのだ。彼女にこつ
ぴどく怒られたあと、僕たちはロサンゼルスに帰る飛行機に乗せら
れた。

あれからサミュエルは何もなかつたように僕に口を聞いたが、意識
が完全に飛んでいた。僕はとても心配だつた。帰つたら精神科医に
見せないといけないかも…

でも、そんなことは彼が受け入れるとはとても思えなかつた。

これは絶対に日本に連れていくしかない!!!! サミュエルのお父
さんとも対決しないといけない。サミュエルは僕が守るんだ!

僕は脅迫的にそう思いだしていた。

「タクミ……」
「ん?」
「ありがとな……」
「何言つてんだよ!」

そして、

サミュエルは家に帰つていった。

どうしてもひとつになりたい、自分の部屋に帰りたい、と言つのを

引き止めないと出来なかつた。

「じゃあ、マーカキヤマー・サミコエルを向ひつの道場に紹介してくれださるんですね！」

柔道の師匠・アキヤマに僕は今回の件を話して行った。彼は前からサミコエルを息子のように思つていたし、日本に行きたい、という僕の考えに賛成してくれたのだ。

「ああ、サミコエルのことは前から気になつてたんだ。タクミがいい考えを出してくれてよかつたよ」

その言葉を聞いて僕は喜んで家に帰つた。
そんなときだつた。事件は起つた。

それは……世界の終わりだつた。

サミコエルがローラをレイプした。

…………

僕は死にたかった……この世は地獄なのか？

どうして、どうして、どうして、どうして、どうして、どうして、
どうして、どうして、どうして、どうして、どうして、

何百回と聞いた、 、 でも運命は答えてなんかくれない！

最初に聞いたときは嘘だと思った。警察につかまつた彼をみてやつぱり信じられなかつた。だつてサミニュエルは優しく微笑んでいたし、悲しそうな瞳は変わらなかつたもの。

ローラのお姉さんが僕んちに来てなにか言つていたけど、僕はよく分からなかつた。僕のせいだと何か言つていたようだけど…

僕のせい？

なんでだろ？

よく分からぬ。

いつたいローラは何をしたんだろう？

「拓己」

母さんの声がした。

「？」

ベッドのそばに母さんがいた。
「あれ？ いつ帰ってきたの？」

「いま。…大丈夫?…」

急に涙がこぼれた。後から後から溢れてくる。そのまま母さんは僕を抱きしめてくれた。

「大丈夫、大丈夫だからね」

「た、たいへんなんだ こんな 母さん、サミニュエルを助けて
… 彼は悪くないんだ 悪くない きっと何かあったんだよ
僕、助けないといけないのに どうやつたらいいのか 分から
ないんだよ…」

しゃくりあげながら母に訴えた。

「そうね。ゆっくり一緒に考えましょう。拓己ひとりで背負うこと
ないのよ」

「でも、でも、早くしないと、、、サミニュエルは犯人にされてしま
うよ」

「きっと、いい方法があるわ 私はこうこうした時のために勉強
してきたのよ。任せておきなさい」

「さあ、これを飲んで寝なさい。お母さんがここにひいているから
母さんはそうして睡眠薬を僕にくれた。

僕は幸せだ。

サミニュエルはお母さんがいないのに… あの寒い留置部屋にひとり
でいるんだろうか。

ああ、サミニュエル… かわいそうに…!

そう思うと涙があふれて止まらなかつた。

きっと彼はお母さんに2度も捨てられたことが悲しくて悔しくてやつたんだ！自分も周囲も女人の人も傷つけたくてやつたんだ。ローラのばか！そんな時に何言つたんだよー？

深い悲しみの中、サミコヘルの金髪と星の王子さまの倒れた姿が重なつてみえた。

ローラは「もうタクミに会わないで」と言つたためにサミコヘルに会いにいったらしい。

なんで、そんな事をいつのつか分からない！？ローラには関係のないことだ。

…いや、分かっている。ローラの嫉妬だ。ローラは僕が好きだったんだらう。

そんなローラを僕は激しく憎んだ。あんな状態のサミコエルになんてことを言つのか！？僕があんなに気をつかっていたのに！　ぬくぬくと育ってきたオマエなんかにサミコエルの悲しみと憎しみが分かつてたまるかっ！

そして…

サミコエルはローラが好きだつたという事実も僕を打ちのめしていた。僕も嫉妬に狂つているのかもしれない…

激しいローラへの嫉妬に苦しんでいた僕の気が変わったのは、事件後のローラを見てからだった。

彼女は完全に打ちのめされていた

ご飯も食べない、水も飲まない、返事もしない、ただ点滴をしてベットに寝ているだけだった。

廃人のようだつた

僕は涙が止まらなかつた

「これがレイプといつことよ」

母さんが僕に言つた。

「確かに彼女の行動には問題がなかつたとはいえない。……けど、これほどヒドイ目に合ひつみうなことはしてないはずよ サミュエルは彼女を殺したのよ……」

「

僕は何も言えなかつた。

「レイプはね 性欲だけでするんじやない、と言われているわ。
それは拓己は分かつてゐるわよね」
僕はうなずいた。

「社会への復讐、とも言える。一番征服しやすい女性をターゲットとする卑劣な行為なのよ。」ここからは本人たちへのカウンセリングになるけど、サミコエルはまずローラに対し元々的な興味を持っていた、第一に父親からローラを受けていた、第三に母親の愛情の希薄さ、飢え、これは今回の事件に大きく影響している。

「そりなんだよ！ サミコエルはお母さんに復讐したかったんだよ」「それだけじゃないでしょ、そんな単純じゃないでしょ！？」

僕は黙つた。

「あなたよー拓郎ー」

「え？ 僕？」

「あなたも関係あるのよー」

僕は何のことが分からなかつた。

「あのね… サミコエルはあなたが好きなのよ。でもあなたを憎んでもいるの」

「僕を？」

「分かるでしょ？ あなたは一番近くですべて持つてているでしょう？ それをサミコエルがどう思つていたか分かる？」

「……」分かる。バンドを組もうと言つた僕をあんなに責めた彼を悔じた。

「今回の旅でサミコエルの心はまつぶたつに分離してしまったの。

あなたを愛している、けど憎んでいる。この不安定さー」

「でも それは」

「そんな時にローラが来て、タクミと私は何回も寝たわ」と言われて「じらんなさい」

-----!

「じゃあオレとむしろよ、となつても不思議じゃないの」

そんな嘘をローラは言つたのか？

「 むずかしいわ 今回のケースは。サミコエルの心が分からぬだけに… 彼のセクシュアリティもね。あと、最後にこれだけ言つておくわ。拓郎、サミコエルはきっとあなたと共有したかったんだわ。」

「 共有？」

「 ローラもね。これは彼の一一番のHP」

なんてことだ！――！

彼の激しさを思つた…

僕は、僕は、どうしたらいいんだろう…

僕には時間が必要だつた。

カリフォルニアの空と空気をじつと感じる必要があった。バルコニーに出て僕はロサンゼルスの町を見下ろした。夏の風が吹き付ける。このままサミュエルは公判が決まって少年刑務所にいくんだろう。その間にいろんな支援団体が入つて被害者・加害者共に再生プログラムが適宜実施される。

母さんに聞いた限りでは、少年のレイプ犯罪は5年から13年くらいの実刑だと聞いていた。今回の場合は悪質性が低いのでもっと短いかもしない、とも聞いた

けど… ローラの状態をみたら軽いと思つ。サミュエルを助けたいと思っても状況をみるとそつも言えないのだ。

人殺しのほうがマシかもしれない ローラは以前のように笑つたり、怒つたり、出来なくなつた。自殺する危険性があつた。

ローラは正義感の強い女の子だった。ボランティア活動に積極的にかかわっていたし、小さい子の面倒もよくみて本当にいい少女だつた。彼女の輝ける未来は今暗く閉ざされてしまった。

母さんに憧れてブルネットの髪を長く伸ばしあじめていた、とも聞いた。

ローラは生きながら殺されたんだ。

「ミーハー・アキヤマがサミコールの保護責任者になつてくれたわ」母さんがリビングに入ってきた。

「じゃあ、僕も会えるの？」

「それは無理」

やはり……当分は弁護士やカウンセリングチーム、そして保護責任者くらこしか会うことは出来ない。

でも、ミーハー・アキヤマでホツとした。

「 拓己 」

思い余つたよつて母さんが口をひらいた。

「あなたがサミコールのことを気にするのは分かるわ……でも、もうあなたにはどうする事も出来ないのよ」

「そんなことない！」カツとなつた。

「そんなことない！……絶対に何かあるハズだ、僕に出来ることが

つー

」

しばりへ見つめ合つた。

母は田を伏せた。

「確かに 長い田でみたら、あなたに出来ることはあるわ。でも、今のあなたはサミコールから離れないダメだと、母さん思ひ」「なんで！？」

「あなたもサミコールも一緒にいたら更に傷つくから」

分かつてゐた

もう、ふたりで心のバオバブを見られなうこと

サミュエルがもう今までのようになくなってくれないだらう」と

それを認めたくなくて僕は、僕は、僕は、

「ねえ、拓己　　日本に行こう　　あなたのもう一つの祖国を見るのよ。サミュエルが行きたがつてた日本をみるのよ。それがあなたの責任だとと思うわ」

「責任？」

「そう。直接サミュエルを救うことは今は出来ないけど、将来はきっと役に立つわ。サミュエルと同じような子供が日本にもいっぱいいるの。

あっちの方が表面に出ないぶん根が深いわ。そこであなたは勉強して。日本のサミュエルをどうしたら救えるのか」

「僕、出来ないよ　　母さんみたいに立派じゃない　　それに頭がいっぱいなんだ。人のことなんて救えないよー僕は自分のことついぱいれ」

「　そうね　　」

ふわりと風が母さんの髪をやさしくなでた。

どうしてこの人はこんなに綺麗で強いんだろう。そしてすこいんだ

う。こんな人が僕の母親なんて奇妙な感じだ。

そして、フツと実感した。

サミコールの気持ち。

母さんみたいになりたい けどなれない。

それと同じで、どう頑張ったって彼は”タクミ”になれない。目に見えるものばかりで見てたら、僕にかなうものが無い気持ちは敗北感につながる。

自分がちょっと怖くなつた。だって今の僕は母さんがつくつたんだも。出来が悪くても、僕は母さんの子だから、やっぱり普通じゃないと思う。

そんな僕を愛したらつらいのはサミコールだ。

隣にいるのがつらくない訳がない。『オレはタクミを守つてやるものがなにもない！オレはタクミより何もかも劣つてる』てね。

でもね、僕へのコンプレックスなんて錯覚なんだよ みんな”見えている”ものばかりに対してもじゃないか

心の田でみていろよ

サミコール

金色のひかり

少年刑務所に送られて、1ヶ月ほどたつてやっと面会が出来るようになつた。夏休みも終りうつとしていた。

弁護士のロバートソン、M・アキヤマ、母、そして僕。母は「」の間日本とロスを何度も往復していた。仕事が忙しい様子だつた。

カフェテリアで会えるようになつていた。開放的な雰囲気に少し驚いた。

「お忙しいところありがとうございます」
サミュエルは少し痩せたようだったが、顔立ちはスッキリとしていた。ちょっと大人になつたように見えた。

ひと通り近況やこれから状況を話してから、僕たちはふたりにしてもらつた。

母とアキヤマはロビーで待つていた。

「H・J・少し痩せたんじゃないかな、タク!!」「サミュエルだって ここのは飯おいしくない?」「ああ(苦笑) 確かに… でもジャンク(フード)抜けして丁度いいよ。」

さわさわさわ 少し伸びた金色の前髪がサミュエルの睫毛の上を泳いだ

「 もう、来るな 」
サミコエルは何の感情もこめずに言った。

「 もう、君へ来るな、タクミ… 」

「 」

僕は予感していた
きっと今、銅像のような顔をしているのだろう。

「 オマエのそんな顔を見るのはたまらないんだ。 」

「 ふふ 」自嘲気味に笑った。

「 そんな 女神のような顔で微笑まれたら、たまらない 」

「 ? 」

「 最初に会ったときはびっくりした。オーロラ姫は本当にいるんだ
と思った。でもオーロラ姫はなぜかオレと同じBODYでしかも何で
も出来るスーパーマンだった 」

「 」

「 オレは困った… 高嶺の花のオーロラ姫といられるのは本物の王
子だけだから。 でも オレは王子にはどうしてもなれなかつた
つらかったよ 」

「 サミコエルは 」僕は口を開いた。

「 気付いてないかもしれないけど サミコエルは王子だったんだ
よ 」

「 ? 」

「 僕もロイもディビットもどうしてサミコエルについていつてたと
思う? ビウしていつもリーダーだったと思う? 柔道教室でヒーロー

だつたのは誰だと思ひ？

エリックたちとケンカして負けても負けても最後に勝つたのはなん
でだと思う？僕を守るため人を殺してもいいと思つたのはなんでだ
と思う？」

「

「ミーハキヤマが親がわりになつてくれたのは何でだと思う？」

「

「みんな、みんなサミュエルが皆に優しかつたからじゃないか？弱
いものを守つて闘つてきたからじゃないか？」

サミュエルは泣きそうな顔になつた。

「サミュエルは王子の種をちゃんと持つてゐるんだよ
僕は彼から目をそらさなかつた。

「僕たちはまだまだ子どもなんだから成長する。その成長の速度は
きっと色々なんだ。一部とつて僕と比べたつてそれは意味のないこ
となんだ。

僕といてひけめを感じるなら、そのひけめを上回へりサミュエル
のいい所を伸ばしていけばいいんだよ」

「でも オレはローラ

「

僕はひと呼吸した。

「聞いてると思ひけど 僕とローラは何もなかつたんだ

彼は小さくうなづいた。

「…オマエとSEXしているローラーとSEXしたかったんだ… どうして…」

「

喉がつまるような甘い気持ちが僕の中から湧いてきた。

僕とサミコールが直接的な関係になれないのは、お互いの性嗜好のせいなんだろうか？

SEXできれば、ラクだつたね

未熟すぎて僕達の性はまだまだ分からないことばかりだ。。。。

「また、会おう」

「来るなよ」

「違うよ… もっと大人になつたらさ。そしたら僕たち2人でSEXできるかもね。もつとも僕がおっさんになつてたら、ゾッとしてサミコールは逃げ出すだろうけどさ（笑）」

「タクミはならないよ」

ならぬよ。言葉には出さなかつたけど、そう決意した。

「はい」

僕は”星の王子さま”をサミコールに手渡した。

「これ、サミュエルにあげておくよ……あの木の前で話したこと、忘れないで」

震える手で受け取ったサミュエルに、僕はこくり笑って席を立つた。

そして、そのまま彼から立ち去った。

「タクミー。」

サミュエルは立ち上がって叫んだ。

「バオバブに似たあの木 背中を合わせて話した時間、オーロラ色の星空 オレは忘れないから！」

「僕も。僕も同じ本を読むたび…金色の星を見るたび…サミュエルの金髪を思い出すよ」

振り向かず、後ろ手に振つて僕はカフェテリアを出た。

さよなら、ロサンゼルス

僕は日本へ飛びだつ。

もっと強くてたおやかな人間になれるよつこ。

恋するのよつになれるよつ。

でも

忘れなこよ。ナリコヘルと過ごした時間。

僕たちは、あの時間の宝物をもつてゐる。それは確かなんだ。ほら、金色の町の光が僕の下にひろがる。

それは、サミュエルの髪の色だ。彼の心の色だ。

どこにいても僕はこの光の色をみると、君を思い出すんだ。

(完結)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9524b/>

残酷な女神・拓己

2011年10月3日22時39分発行